

TOKYO美人と、東京100ストーリー

心は翼 連載③ (011六義園)

穂高健一

古樹の桜の枝では、メジロが
花卉の蜜を吸っている。1……
3……5羽と、鳴野佐和子が数
えながら指す。井伊佳元は目
のかわいいメジロを一瞥してか
ら、佐和子の横顔をみた。うす
紅色の桜が似合う、すてきな女
性だと思った。

六義園の彼女は入院ちゅう
の暗さと違い、明るさが感じら
れた。明治神宮の本殿に参拝したときよりも、さらに明るい。
しかし、心の悪魔にいまだに苦しめられている姿には変わりがな
かった。

「この際はできるだけ早く、20年前の犯行現場となった八ヶ岳



周辺に向いてみよう。山岳に雪があるうちに」

井伊には、裏稼業人に徹するぞ、というつよい意志があった。
「お仕事が忙しいんでしょ、大丈夫ですか」

彼女はこちらを気づかう、やさしい口調だった。

「スーパールの店長ほど、ヒマな職業はない」

「えっ、ほんとうですか？」

彼女の目には信じられない光があった。



「部門ごとに、一挙手一投足の細かなマニュアルがある。店長が
手を出さず、部下任せで口も出さなければ、各部門のチーフが勝
手に動いてくれる。そういう仕組みができています。それに逆らっ
て、店長が部門に首を突っ込めば、底なし沼のようにはまり込み、
しごとに追われる。そして、終わりがなくなる」

「むずかしそうなおしごとですものね」

「ものは考えようだ。どの部下にも、『この店長は何もやってく
れない』と信じ込ませれば、それは儲けもの。もめごとが避け
て通ってくれる」

「いい加減さんは性格からして、そんないい加減な仕事ができな
いのですよ。荒波のように、仕事は次々にやってくる」

「まあ、後ろ向きの仕事が多すぎる。おれの上司の部長にい
わせれば、店長として管理力不足、指導力不足、判断力不足だか

ら、しごとが空回りしているらしい」

「そんなふうにいわれたら、いい加減さんが気の毒」

「とはいっても、上司の評価はほとんど気にしていない。マイペースというか、自分の判断でしごとをしている。それがおれの信条だから。荒波に飛び込むことも多い。リスクを背負ったしごとが好きなのもかもしれない」

「このあいだ、明治神

宮で、上司のお方から電話が入っていたでしょ。店に帰られて怒られませんでした？」

彼女はここ一週間、気になっていた口ぶりだった。



「毎度のことだ。へび年生まれだから、毒蛇のように、どくろを巻いて待ち構えている」

「こわい。わたしでしたら、足がすくんで、会社に帰れないわ」
彼女の目は自分のことのように怯えていた。気の弱そうな女性だと思った。

「なあに、子どもの癩癩とおなじ。怒り癖がある。三つ子の魂、百まで。百一歳にならないと、直らない性格だ。あと半世紀はだめだな」

そういう一方で、井伊の脳裏には、あの日の池袋店の状況が浮かんでいた。

2階の店長室では、鬼頭部長が店長椅子に座っていた。かれは苛立った顔で、腕組み、井伊が帰ってくるのを待ち構えていた。視線が合ったとたんに、鬼頭が眉間を吊りあげた。

「……社長の店まわりがない、とわかったから、店長のしごと放り出し、明治神宮で遊びまわっていたのか」

「言い訳はいたしません。お客さまのためだと、判断したからです」

井伊は立ち姿勢のまま、殊勝な態度をとった。

「それが言い訳だ。社長よりも、女との逢引を優先する。若い女のお客だとみれば、シッポをふって、すり寄っていく。店のしごとを蔑ろにして、出かけてしまう。店長の資格はゼロだ。

3日に空けず、大病院に見舞っていた。これだって、院内の喫茶室あたり

で、油を売っていたのだらう。退院した日に、明治神宮で忍び会ったり、店長業務の遺棄だ。業務態度がなってない」

「鬼頭の目が獣的な怒りで光っていた。誤解を与えたこと、お詫びいたします」



「なにが誤解だ。非を認めていないから、反省のことばが出てこないのだ」

「部長には、すなおさがないな。心から謝罪しています」

「すなおさがない？ 井伊店長から、それだけは言われたくない。非を認めない人間こそ、素直さがない、というんだ」

鬼頭は怒りが抑えきれない表情で、拳で机をたたいた。

「素直に認めます」

「店長がでたらめな仕事ぶりだから、この店の全従業員に悪影響を与えている。だから、池袋店は無気力な最低の店舗になってしまったんだ」

「こんかいは誓約書にしますか、始末書にしますか？」

「キミの始末書はこれまで何枚ももらった。反省もなれば、改善の意志もなければ、紙くずも同然だ。子どもが書道で、半紙に書くよりも、心がこもっていない」

鬼頭は過去からの不始末をCDから取り出すように、次つぎに持ち出してきた。よくも忘れずにいたと思うほど、執念ぶかく記憶のなかに納まつていた。

「こんかいは懲罰委員会にかけて、1週間の出勤停止処分とさせる。本社に帰ったら、きょうにでも人事本部長に、委員会の招集を申し立てる」

懲罰委員会は、取締役の常務会メンバーが中心となる。加えて人事部長、総務部長、懲罰の関係する部長などによって構成される。審議の内容はいつさい部外秘だった。

「7日もあれば、自己啓発に使えます」

「喜ぶな。自己啓発だつて、7日間の海外旅行でもいく魂胆だろう」

「それもいいですね。インドあたりについてヨガで、精神面の強化してくる」

「それ以上、凶太い神経といい加減な精神を強化して、どうする気だ。懲罰が決まれば、自宅謹慎だ」

「それなら、謹慎は八ヶ岳の山小屋で」

「自宅からの外出はいつさいダメだ。それに7日分は給料カットだ」

鬼頭はなおも怒りつづけていた。

井伊は、こうした経緯を佐和子にかい摘んで教えた。
「ふたりは緊張のなかにおいても、ひととき庭園の鑑賞を持ち、景観を楽しんだ。」

「お聞きしてもいいですか」

彼女は案内図の前で立ち止まった。歴史好きのかれは、六義園について、

「お答えしよう。この六義園は小石川後楽園とともに、江戸の二大名園だった。とても、美しい庭園だ。1695（元禄8）年に、柳沢吉保が徳川綱吉・第五代将軍から下屋敷として与えられた。池



を掘り、山を築き、千川上水の水を引き込んだ」

和歌の趣味を基調とした、

繊細な日本庭園だ。万葉集や古今和歌集に詠まれた、日本の名所を取り込んだ、みごとな景観だ。

明治時代に入ってから、三菱の創設者だった岩崎家の所有になった。昭和13年に東京市に寄付された。

「どうなりました？ 懲罰委員会のほうは」

「歴史の質問かと思った。明治神宮の参拝はお咎めなしだった」

「よかった」

「でも、別の理由で、3日間の出勤停止処分だった」

というと、彼女の顔がくもり、口を閉じた。

「処分の理由は、明治神宮の同行ではなく、お客さんに大ケガさせたのは、店舗の安全管理に重大な手落ちがあった、管理責任を問うというものだった」

「すみませんでした。私のほうも、注意が至らなかつたばかりに」



「あやまることはないさ。おれのことを妙に鼻屑にする、ワンマンが社内に独りいるんだ。盆暮れに贈り物したわけじゃないのに」

井伊の耳には、部外秘の懲罰委員会の内容が洩れて伝わってきた。

最終決済の松平会長からクレームが出た。井伊店長が神宮に同行したのは、大腿骨を骨折させた、お客さまへの退院日の付き添いとして当然だ。お客様第一主義の正しい判断、セーフティ店長の鏡だ。事故が発生したとき、店長はクレーム処理で出かけていた。そこには手落ち、手抜きは一切ない。懲罰委員会は公平性に欠ける。もういちど審議せよ、と差し戻しがあったのだ。

再招集はもの数分間で終了したという。井伊は無罪放免。オーナー会長の意見にたいして、サラリーマン社長は逆らえないのだ。

「よかった。この鯉のように、自由な身になれたのですね」

彼女が橋のうえから、池面をのき込んだ。

橋を渡ると、古木の桜が満開だった。

「よし、この場で決めた。八ヶ岳は来週の月曜から出かける」
井伊が自分自身に決断をもとめる口調でいった。



「いい加減さんは、行動力に満ち溢あふれているんですね」

「早く行動すれば、それだけ早く道が開ける。それがおれの信条さ。出かける前に、佐和子さんに確認しておきたい」

「なんでしよう」

「犯行現場だが、蓼たてしな科スキー場のグレンデで、佐和子さんが雪だるまをつくって遊んでいた。お母さんは宿泊ホテルのトイレに行った。このわずかな時間で、誘拐ゆうかいされた。これに間違いはないかな？」

「事実か、と問われますと、自信はありません。小学生のころ母から三、四度、聞かされたくらいです。わたしが10代になると、もう祖父母も、両親も誘拐事件を口にしませんでした。むしろ、その話題ができない雰囲気でした」

家族や身内は、娘の心を気づかっただろう。年頃になると、誘拐の事実を掘り下げるほど、ショックから心が傷つくといいい、話題を避けたと思われる。

井伊は裏稼業人の立場から、米国にいる両親に、あれこれ訊きたい心境だった。……身代金として、お金が動いたのか、動かなかったのか。救出された少女の身柄は、どこで引き渡されたのか。病院の診断書はどうだったのか。それらはすべて犯行の手口を知る、重要なものだから。

「わたしは悪魔に心を痛められました、からだまでは傷つけられていません。この事実には確信があります」

彼女が明瞭めいりょうに、犯人の猥褻わいせつ目的を否定した。

「身代金目的でもなく、卑猥目的でもないとするれば、鳴野家の家族にたいする怨念おんねんか、嫉ねたみか。米国の両親に訊きたいところが、質問しても本当のことは話さないだろうな」

「そう思います」

「むしろ、真実は語らず、偽りの情報を流してくる可能性がある。それにふり回されると、かえって事件の真相がつかめなくなる。犯人捜しの方向を誤ると、真実から遠のくだけだ」

このさき当時を知る元消防団員とか、元警察官とか、山小屋関係者とかをさがしだして、状況を聞きだす。そのほうがより真実に近い情報が得られるだろう。

「わたしの記憶に、はつきり残っているのは、家族3人でロープウェイ山頂までいったのに、父のスキーが見られなかったことです。その気持ちがとてもよく残っています」

その口惜しさを語っていた。

「家族3人はロープウェイ山頂までいった。これは誘拐事件のなぞを解く、キーワードになりそうだ」

「いい加減さんは真冬に、蓼科ロープウェイに乗られたことがあります？」

「何度も。山頂きたよこだけ駅から北横岳は冬山の入門ルートだから、冬だ



けでも5回以上は登っているかな。雪崩がない処だし、眺望ちようぼうがいいところだ。蓼科の地形や積雪状況などはわかるが、犯罪現場だという目でみたことはない。こんどは犯人を追撃する目で、犯行現場をじっくり見てみる。そして、犯人を追いつめる」

「悪魔は、まさかいまになって、池袋の裏稼業人が乗り出すとは思っていないでしょうね」

「きつとそうだ。犯人は20年経った、もう時効が成立している、完全犯罪の成功だ、おれは優秀人間だと内心うぬぼれているはずだ。それが油断につながってくる。6歳児に宿った悪魔が佐和子さんの心に存在するかぎり、事件は終わっていないのだ。法的には時効でも、完全犯罪であざ笑う犯人を、叩きのめしてやる。同時に、犯した罪に途轍もなく、おびえさせてやる」

井伊は力をこめた。

茶屋の前を通り、渡月橋の上で、ふたりは足をとめた。彼女が手帳を取り出した。大泉水の中ノ島的美観をみながら一遍の詩を創作した。さらに、満開の桜の下でも、彼女はペンを取った。

「佐和子さんは詩人だけで、食べていけるの？」

入院ちゅうの彼女は身辺を語ろうとしなかった。それは訊きたくても、聞けなかったことだった。



「いいえ。日本は『詩』だけで食べていけない国です。私は書店に勤務しています。書籍の販売データの分析や解析をして、取次店や版元に情報として流すしごとです」

「すると、大手書店だな。紀伊国屋？ 丸善？ 八重洲ブックセンター？」

「裏稼業人は上手に聞き出してくるのですね。これ以上の情報提供はなし」

彼女は掌てのひらを口にあてた。

「八ヶ岳で、良い情報がつかめたら連絡したい。あるいは逆に、現地から情報の提供を求めるかもしれない。佐和子さんのケイタイ番号を教えてほしい」

「だめです。わたしの番号を教えたら、悪魔がいい加減さんに襲いかかります。これから八ヶ岳の雪山に登る人には、教えられません」

彼女はファンタジー的なこだわりを持っていた。

「悪魔が襲いかかってくれたら、それだけはやく誘拐犯せうきやくはんに接触できる。ラッキーだ」

「私は、もう悲しみたくはありません。渋谷の道玄坂みちげんざかで恋人を失いました。そのうえ、いい加減さんの生命までも失いたくはありません。わたしが公衆電話からお掛けします」

「公衆電話だと、番号が読み取られない。いい警戒心だ。一日2回は連絡して欲しい。電波が届かない場所があっても、しつこく」

彼女はうなずいた。

「大学陸上部でコーチをしている、恋人の名まえは？」

「もう過去の人です」

「かれが嫌いになったのか。道玄坂で刺されたのは男のほうで、なんにも悪くないというのに。女は恋に冷めると、同時に嫌いになるからな。未練もなくなるからな」

かれは皮肉たっぷりに投げやりな口調でいった。

彼女は下向いて、唇をかみしめた。

「雪の八ヶ岳は、断崖絶壁、雪崩、死と背中合わせなんだ。裏稼業人は生命をかけるんだ。それなのに、『恋人の名まえは教えられませんだつて。もう過去の人だつて』。だったら、何の目的で、心に翼をつける？ 心の悪魔をただ取り払うためなら、ご利益のある神社で、お祓いをしてもらったらい。心に翼など要らないじゃないか」

井伊はかなり語気を強めてみせた。彼女はなおも無言だった。

「佐和子さんには、犯

罪に影響された深層

心理がかならずある。ふだんは意識して遠ざけたり、無意識に思い起こさないようにしたりしている。おれにはまだ話しきれないものがあるはずだ。過去には恋人に何気なく話したことが、



ちがった角度の重要な情報になったり、事件解明のヒントになったり可能性がある。あるいは大切な決め手になるかもしれない」

「会われるんですか、かれと」

「会うのは当然だ。事件が解決したら、鳴野佐和子さんと結婚してやってくれ、と頼んでおく」

「えっ。それは止めてください」

「冗談さ。求婚は当事者どうしものだ」

「芝浦達也さんといいます」

「本心からかれが好きで、翼があれば、飛んでいきたいんだろう」

「はい。でも、達也さんとの結婚は夢のなかの夢です」

彼女は細い声でいった。

「ひかえめに生きるのも、ていど問題だ。もつと堂々とたくましく生きるべきだ。あしたからは近くの神社に、毎朝、お百度参りで、『心の悪魔が退治できたら、芝浦達也と結婚します』と10回くらい叫ぶといい。そうやって結婚への気迫を生み出す。この六義園で一度練習だ」

彼女はうつむいてしまった。

「おれがやってやる。鳴野佐和子は、心の悪魔が退治できたら、芝浦達也と結婚します」

かれが両手をメガホンにして、大声で叫んだ。くり返した。彼女は顔を真っ赤にしていた。

ふたりは園内の遊歩道を進み、小さな橋を渡った。彼女がここに立ち寄りたといった。

茶屋のベンチで、ふたりはお抹茶を飲んだ。

「新聞のことが気になります。もし母から聞かされた、誘拐事件が作り話だったら、いい加減さんの努力がムダになります」

「新聞に載っていない誘拐事件は、たしかに奇怪だ。しかし、佐和子さんの心には悪魔が存在する、この事実は消せない。どこまでも誘拐事件はあった、と信じて行動する。迷いは禁物だ」

「もう一度、新聞を調べなおしてみます」

「それがいい。20年前とか、誘拐という語句にこだわらず、弾力的に領域を広げて調べたほうがいい」「そうします」

「今日じゆうに登山の準備をやっておかない、と。勤務日は何かあって店からの帰りが遅くなるか、わからない。八ヶ岳は単独行だ。いま自分もっているテントは4、5人用だから、1、2人用の軽い素材のテントがほしい。これから登山用品店をのぞいてみるか。佐和子さんはどうする?」

「国会図書館にいつてみます」

ふたりは六義園の正門で別れた。彼女の足は地下鉄・南北線のほうに向かった。



井伊は駒込駅から山手線で池袋駅に出て、東口にある2軒の登山用品店をのぞいてみた。納得できる形状のテントがなかったことから、かれは新宿口のスポーツ店まで足を伸ばした。そこには気に入った冬用テントがあった。

その素材を確かめていると、見覚えのある男が目のまえを横切った。日焼け顔の山崎勉で、冒険スキーヤーだった。二つ先のコーナーで、かれは補助ザイルを選びはじめた。

(あの男は20年前の、八ヶ岳の山小屋事情に通じている。話しかけてみるか)

少女誘拐事件との関わりでも、なんとなく気になる人物だ。井伊はごく自然に冒険スキーヤーに近づいていった。

「おや、退院なさったんですか」

井伊は故意におどろきの口調でいった。

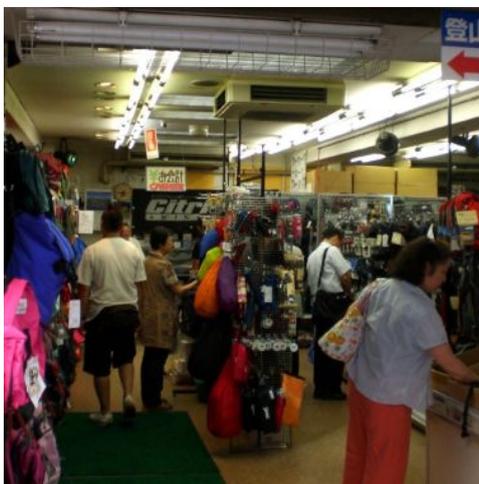
「お陰さまで、3日まえに。えっと、どこでお会いしましたか?」

山崎が首をかしげた。

井伊はポケットから

革製の名刺入れを取りだしながら、

「医科大の休憩室です。冒険スキーの体験談を聞きながら、世の



なかにはすごい人がいるな、と感心させられました。私はこういうものですよ」

「いいかげん、さん。面白い名だな。セーフティーとは？」
「スーパードです」

「店長ですか。私は山崎勉です。名刺は持ち合わせてないので「けっこう。病院での結婚話は愉快でしたよ。大学時代は山小屋で働きながら、8年間も学費を納めたけど、卒業証書はもらえなかった。見返りに、山小屋の娘さんを嫁にもらった……」

「それは退屈な入院患者に、話を面白くしただけです。信じられた？ あれはずいぶんフイクションが入っている話ですよ」

「山崎さんの出身は土佐の高知……。これは？」

「それは事実。自分は遠洋漁船の網元の家に生まれ育った。だから、見なれた青い海よりも、白い峰が望める信州の大学に入った」

2年生のときだった。親の持ち船の漁船が南洋で転覆して、七人も死んだ。親の稼業はそれで左前になり、仕送りがゼロになった。だから、山小屋でバイト



をはじめた。それでも、学費が滞納して、3年生で除籍になった。

「これがほんとうの話。店長も、8年生の話にごまかされたわけだ」

山崎は奥歯が見えるほど、磊落らいらくに笑った。
「バイトした八ヶ岳の山小屋はどちらで？」

少女誘拐事件の犯人につながるか、という期待から踏み込んでみた。

「天狗岳小屋。オヤジは酒飲みで、茅野ちのの自宅にいて、ほとんど山に入らなかった。おれに任せきりで」

「その山小屋経営者の娘さんを嫁にもらった……」

「いや、ちがう。ふたりの娘はすでに嫁いでいた。山小屋のオヤジから、大学中退なら、若さが値打ちのときに結婚しな、とすめられて見合いたのが、松原湖に近いペンションの一人娘。ムコに入ることが条件だった」

彼女は80キロの巨体だった。八ヶ岳山麓に生まれ育ちながらも、山登りが大嫌い、スキーもできない。内心は、楽しくない女だと思った。

「土佐の高知でも、漁師の子で、泳げないやつがいた。それと同じ。おれはペンションの経営者に目が眩くらんだから、女は体形じゃない、心だ、とお世辞をいったら、話が決まった。結婚してみれば、冒険スキーの理解などゼロ。近ちかころはスキー板を手にしたとたんに、稼うぎが悪いといい、愚痴ぐちと、小言せうごんと、いやみの連続だ」
山崎は明け透すけに話す語調だった。

「松原湖のペンションだと、冬場はワカサギ釣り、忙しい？」
「湖畔なら、そういう客あいてもできる。うちのペンションは、6キロ奥まった、標高が1350メートルもある『稲子リゾート温泉』だから、夏場だけの商売。いろいろな大学生が合宿に使ってくる。冬は閑古鳥」

「標高は野辺山駅とほぼ同じだし。温泉地だから、冬の客がまったく居ないわけじゃない？」

井伊が訊いた。

「かぎりなくゼロに近い。冬は雪が積もり、道路が凍結する。東京人は雪上の運転をこわがるから、うちのペンションまでやって来ない。近くにスキー場があるわけじゃないし。窓越しに、八ヶ岳の雪峰をながめるだけじゃ、客は呼べない」

山崎はどこまでも饒舌だ。

「ペンションの近くには、30年前に売出した温泉別荘地がある。開発されたときから、夏場しか使わない。買った人はほとんど素人で、投機目的だった。だから、バブルがはじけたとたんに、別荘の半分は空家になった。いまじゃあ、ゴーストタウンになりつつある。店長が冬場に長期滞在する気があれば、紹介するよ」

「考えてみますよ」

井伊は曖昧に応えた。

「建物そっくり貸切で、何ヶ月でもただ同然で。沈黙考や読書に最適。雪が深々と降り、北風がビュービュー吹く冬場になれば、1ヶ月でも、2ヶ月も、誰一人として訪ねてこない。店長

の息子や娘が大学受験前なら、しずかな場所で勉強には打ってつけど」

「一人娘はもう大学生になった」

「といっても、口達者な男の話はすぐ脱線していく。」

「最近、うちの前はウルトラマラソンのコースになっている。ランナーは練習でも、競技でも、

ペンションで足を止めてテ

ー・ルームでお茶を飲んでくれるわけじゃない。市長はまった

く金にならないスポーツを

振興させている」

「退院後の、冒険スキーはいつから開始？」

井伊は強引に話題を変えた。

「つぎの月曜から、八ヶ岳に入る計画ができています。ピラタス蓼科スキー場で、一日は足なら

しをしてから、2日目、3日目は

体力づくりで、主峰を縦走して本沢ロッジに入る。そこがベースになる。こんかいは、硫黄岳の噴火口跡で、断崖を滑降する。新聞社のカメラマンや、地元ローカルTV局も取材にくる

予定になっている。かれらは機材が多くて重いから、松原湖側から直接、松沢ロッジまで登ってくるけれど」



「ピラタス蓼科スキー場から本沢ロッジまで、同行するかな。わたしは登山者として」

そこは6歳の少女が誘拐されていくルートだ。このさいは山崎勉から、20年前の情報収集を図ろう、と井伊は考えたのだ。

「ぜひぜひ」

乗りの良い冒険スキーヤーだった。ロープウェイ山頂駅で、午前10時ごろに落ち合うことに決めた。

六義園の翌日、井伊は店長室から、鬼頭営業統括部長に電話を入れた。4日間の夏休み休暇を申しでた。

「今ごろ夏休み？ まだ、残っているのか」

「昨年9月には3日間とつていますが、残りは4日間あります」
セーフティの夏休み休暇は7日間ある。3月末までに消化すればよかった。4月に持ち越すと、新年度入りで失効だった。

管理職の店長は非労組で、有給休暇は取りにくい。夏休みの場合はその逆だ。

労組は、『店長の夏休み100%修得』をつよく打ち出している。……店長が夏休みすら返上で、しごとに没頭すれば、家族との交流がなくなる。そうなると、若手社員が店長職に魅力を失う、という理由からだった。

会社側も前向きに推す。店長の夏休み完全修得はほぼ定着してきた。井伊は例外人物で、池袋店にきてから、完全消化などできていなかった。

「井伊店長も、夏休み100%修得か。それは良いことだ。労組

からも強くいわれているからな」

鬼頭は機嫌が良い。裏には何かあるぞ、と身構えた。

「月曜から取らせていただきます。緊急連絡先はケイタイに」

「ただし、夏休みをとる前に、4月1日の店長会議レポートを提出しておく。これが条件だ」

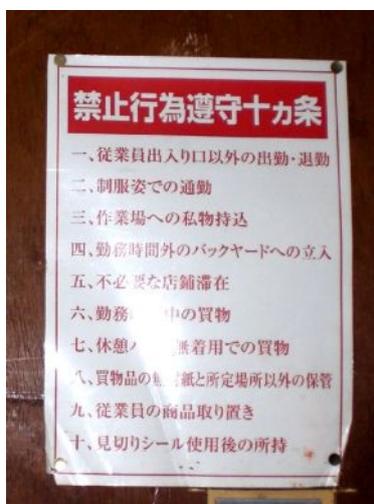
「えっ、ムリですよ。あしたから土曜、日曜の売り込みがつづくし、店長室で落ち着いて、会議資料など作成していただけません」

店長は日常の管理業務のほかに、もめごと、クレーム、機械故障など、その都度呼ばれたり、振り回されたりする。営業時間ちゆうは腰をすえて、会議資料など書いていられない。

「ムリとはどういうことだ。計画的にしごとをしたり、休みを取ったりするのが、管理職のあるべき姿だ。店長の大きなしごとの一つは報告業務だ。会社

でレポートが作成できなければ、自宅に持ち帰ってやればいい。数百人の部下を持った店長はつねに24時間、仕事を中心に考える。女を追って昼間、店を抜けたりするから、しごとがたまり、時間がなくなるのだ」

「データの持ち帰りはルール違反です」



最近は、社内資料の外部流失防止から、データをフロッピーに入れて自宅に持ち帰れない。個人用パソコンは会社に持ち込みが禁止。自宅で会議資料を作成できなくなっているのだ。

深夜まで店に居残ってレポートを書くか、休日出勤しか、選択肢がない。店長は非労組だから、過酷なサービス労働でも、まったくメスが入らないのが実態だった。

「ふだんルール違反ばかりしているくせに、こういうときは律儀だ。いずにせよ、夏休み休暇は店長会議レポートの提出が条件だ。これは業務命令だ」

鬼頭が冷淡にいった。

「4日間の夏休み休暇が明けても、3日間あります。そこで提出します」

「きみのレポートは事前にチェックしておかないと危ない。2年前のレポートをそっくり全面コピーして貼り付ける、悪質な手をつかうからな」

「それは大きいです。部分引用です。それも一度だけだった」

「今後、どんな手口を使うかわからない。要注意人物だ。夏休み休暇はレポートの提出が条件だ」

鬼頭が一方的に電話を切った。

「あの部長からは一筋縄で、夏休み休暇が出ないと思った」

井伊は机のうえに資料を積み上げた。かれはレポートを書きはじめた。頭のなかはしだいに少女誘拐事件に傾いてきた。

(芝浦達也とはいっつかうか)

井伊はパソコンで、勤務先の大学の電話番号を調べて手帳に書き取った。それから、『詩集ノート 鳴野佐和子』を取り出した。……この詩のなかに、誘拐事件の解決のヒント、犯人に結びつく手がかりがあるはずだ。今日もそう信じて迷わず、インドの詩なども含め、丹念に読みはじめた。

無題の詩がいくつかある。以前から気になる詩があった。かれは勝手に「幻想の鐘」と題名をつけていた。



鐘が鳴っている

幻想の鐘 それなのに

夜の部屋に

なまなましく反響する

彼女は、この詩にコメントを書いている。

『まだ、詩というものを書きはじめて間もない十代の頃、どこかに書きつけたフレーズ。その後のゆくえはわからない。気が付くと、わたしの書いてきた詩のなかに、よく〈鐘〉が顔をのぞかせている』

井伊は腕を組んだ。この詩『幻想の鐘』には、彼女の深層心理が反映しているように思えてならないのだ。

店長室にレジチーフがやってきた。

「ベーカリー売場で、男性のお客さんどうしが怒鳴り合っています。店長が入らないと、収まりがつきそうにもないです」

「何でもめている？」

「4歳くらいの男の児が素手で、ばら売りのパンにさわっていたそうです。男性が叱ったから、親との間で、言い争いになったようです。まわりには人だかりができています」

「店長会議のレポートを書こうと思ったのに」

「あら、かわいい『詩集ノート』ね。店長会議はしゃれているんですね。レポートに詩を書き込むんですか。読んでみたい」

「これは関係ない」

「わかった。鳴野さんの詩集で、店長は心を癒いやしている。そういう愛っていいわね」

「愛？ 誤解だ、勘違いだよ」

「照れている。顔が赤くなった」

「からかうな」

井伊は従業員用の階段をつかって1階に降りた。店内へのスイングドアを開くと、男の怒鳴り声が耳に飛び込んできた。

ベーカリー売場に視線をむけると、幼い子連れの30歳代の男性が顔を真っ赤にしていた。言い争いの相手は、後ろ向きだが、40代後半らしい。近づいてみると、池袋中央小学校の与謝野副校長だった。

数歩離れたところには、久能幸子教師がいた。彼女は戸惑とまどった顔だった。手元には学校のロゴ入りの茶封筒を持っていた

——そんなにも、うちの子を怒らなくてもいいだろう。さわったパンを買えばいいんだろう

30代の父親がやたら怒鳴っていた。

——買う、買わない以前に、躰しづけの問題だ。まったく監督ができてない。

与謝野副校長は黙っていた。井伊は内心、ここで与謝野が黙っていてくれないと、もめごとが止まらないと思っ



た。井伊はあえてふたりの言い分を、それぞれから聞く態度をとった。急に水をかけないで、争い疲れるのを待つ。その策が経験から望ましいとわかっていた。

——親の監督や躰すじあまで、とやかくいわれる筋合すじあいはない。父親が店長の存在を意識し、つよく反発する。

——家庭内教育は大切だ。小学校に上がるまえに、子どもをしっかりしつけておかなければ、子どもの生涯にわたって影響する。

与謝野は理づめで反論していた。

——おれが、満足に子育てができていないというのか。

——子どものわがままを、野放図のほうずにしている親が多すぎる。子どもがさわったパンを他の人が買うと、汚い。

——息子に、このパンを買ってやると言ったから、息子がさわつたんだ。おれが買う。パンだ。息子がさわつた。パンを汚いだなんて、思ったことはない。

そばの子どもは泣き出している。

——それは取ってつけない訳だ。逃げ口上だ。

——逃げとはなんだ。最初から子どもをやさしく諭すなら解るが、いきなり怒鳴りつけられたら、子どもだって泣く。怒鳴ったほうが、良い気分になっている。

——社会全体が子どもを育てる。そういう気持ちで注意した。

与謝野は教員の自尊心からか、負けていなかった。

久能幸子教師が、この場の争いの助け舟を求める視線を井伊にむけてきた。かれはうなずいた。

「ほかのお客さんに、ご迷惑です。皆さんはスーパーで気持ちよく買物したくて、このセーフティーにきています。ここは買物の場所です。法廷じゃない。言い争いの決着が欲しければ、店の外でおやりください。弁護士でも呼んで」

二人の赤らんだ顔が、熱した鉄に水をかけたように、すつと冷えてきた。

子連れの男はひと言、ふたこと、すて台詞をはいてから立ち去った。

「このごろの親はどうなっているんだ。幼児教育や、家庭内教育がいちばん大事なのに」

与謝野副校長が、その背中にむかって言った。その視線が井伊

や久能教師に方にむけられた。そして、社会全体が、他人の子でもいとわず躰に協力すべきだと思おう」

「先生は、真の子どもも想いだ。最近、なかなか注意できる人がいない。若者はすぐ切れて、怖いからといって」

「ちよつと興奮してしまいました。あんな親に育てられた子どもが、やがて小学校に入ってくるのかと思うと、なさけない」

「どうぞ、店長室のほうに」

「お忙しいでしょうから、きょうはここで。社会化見学の、生徒たちの感想文をお持ちしました。氷点下25度に近い、冷凍庫の体験が最も人気があったようです」

与謝野がうながすと、久能教師が茶封筒から取りだし、さしむけて来た。

「わざわざ、ごていねい」

「こんかいは感想文だけです。文集は写真入で来月に完成しますから、あらためてお持ちします」

久能教師がそうつけ加えた。左の指輪がダウンライトで光った。

「ところで、久能先生はどちらで結婚式を挙げられましたか？」
「明治神宮です、昨年の秋に」



「もしか当たっていたら、これは奇遇になるかな。参列者のなかに鳴野さんって、いうかたがいましたか。26歳の女性で、大手書店に勤めているようです」

「私がお招きした方のなかには？ シギノさんはいませんかけれど」

「そうですね。彼女の勤務先が知りたかったもので……」

「夫の方の関係かしら？ 帰ったら訊いてみます。どんな字を書きますか？」

「……、どう説明したら、いいのかな？」

井伊はあえて、言い争いの興奮がのこる¹与謝野副校長にそれを振ってみた。

「こうだよ。渡り鳥の鳴と、野原の野、佐和子はふつうの名まえ」と口で説明する。

「シギという漢字がわかりません」

久能教師が首を傾げた。与謝野がボールペンを取りだすと、彼女が手にする茶封筒に、「鳴野佐和子」と書いてみせた。そのうえで、鳴野の漢字にはシギノと、ルビをふった。

「勤務先ですね。夫のほうの参列者にいましたら、ご連絡します」
そう約束してから久能教師が、鳴はどんな鳥ですか、と与謝野に訊いていた。



写真モデル・森川詩子さん

詩集「受容」(有本多企画・小林陽子さん(詩人))

写真提供(ロープウェイ関係) (株)ピラタス蓼科ロープウェイ

写真提供(インド)・インド政府観光局

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】

【つづく】